The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創刊号発刊によせて
Author(s)	中島, 和子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2005, 1, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25017
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

創刊号発刊によせて

この度『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』創刊号が発刊の運びとなったことは、誠に悦ばしい限りです。

振り返ってみますと、「母語・継承語・バイリンガル教育研究会」が正式に歩み出したのは、2003 年８月８日でした。引き続き同年第一回（８月９日）、第二回（１１月２８日）、2004 年に第三回（２月１４日）、第四回（８月８日）、第五回（１１月２７日）と、わずか２年の間に精力的な活動を重ねてきました。研究会、ワークショップ、夏の大会と会の形式もバラエティーに富み、討議された内容も多岐にわたります。これまで取り上げたテーマを挙げると、「母語はどう後退するか」、「継承日本語児童の読みのミスキュー分析」、「両方の言葉の力が弱い子どもに対する対処の仕方」（第一回「母語・継承語を考える会」）、「母語・継承語の語彙」、「JSL バンドスケールの使い方－こどもの日本語能力を何のためにどう測るか－」（第二回研究会）、「母語喪失を語るための基礎知識」（第三回ワークショップ）、「日本における母語・継承語教育－その実態と可能性の追求－」（第四回大会）、「聾・難聴児教育を考えるための基礎知識－聾・難聴児の言語力」（第５回研究会）となります。この中で、第三回と第四回の発表論文を中心にまとめたものがこの創刊号です。

そもそも「母語・継承語・バイリンガル教育研究会」を立ち上げる契機となったのは、日本語教育学会春季大会（2003 年 5 月 25 日）で行われたパネルディスカッション「もう一つの年少者日本語教育－継承語教育の課題」でした。開催後、パネルに参加したメンバーがそれぞれの熱い思いを捨てきれず、力を結集させて立ち上げたのがこの研究会です。８月８日夜、桜美林大学大学院で多数の参加者を得て立ち上げの会を開きましたが、そこで確認し合った会の目的と対象領域は次のとおりです。バイリンガル（多言語教育を含む）を必要とする年少者、特にマイノリティー言語を母語とする児童生徒の言語教育の研究の活性化、実践活動の質の向上、情報の収集と交換を目的とし、焦点を当てる領域としては当面、①先住、定住、新来児童生徒の母語・継承語教育、②日本人・日系児童生徒の継承語としての日本語教育、③聾児のためのバイリンガル教育、④海外・帰国、国際学校児童生徒、各種イマージョン教育の４つです。というわけで、会の原点にあるのはパネルディスカッションであり、その概要を『プレ創刊号』として当研究会のホームページに載せてあります。この創刊号の前身に当たるものです。

以上いずれの領域を見ても既存の言語教育関係の学会では、継子扱いされがちなものばかりです。私たちの研究会は新しい流れを作るべく、ささやかな努力を始めたところです。今後国内外の母語・継承語教育、バイリンガル教育研究に関わる諸団体と交流を深めながら、人類の言語資源を守り、母語習得の重要性を訴える諸活動を続けて行きたいと思っています。

ご存知のように、研究活動を一冊にまとめて発刊、世に問うという作業には、多大のエネルギーと時間、複数の人間の献身的な努力が必要です。創刊号も例外ではありません。発刊に際して多くの方々にお世話になったことに対してまずお礼を申し上げたいと思います。特に口頭発表を論文にまとめる労をとり、快く寄稿してくださった執筆者の方々に感謝いたします。ただ実際に創刊号の誕生を可能にしてくださったのは、研究会立ち上げのメンバーである湯川笑子氏と佐々木倫子氏です。湯川笑子氏は、自ら第三回ワークショップの講師、第五回研究会の企画、開催校を務める傍ら、デザイン、構成、編集その他発刊に関するすべての労をとってくださいました。それを財政面も含めてあらゆる面でサポートしてくださったのが、MHB研究会事務局を支えてくださっている佐々木倫子氏です。お二人の多大のご尽力に対して、会を代表して心から感謝の意を表したいと思います。

「母語・継承語・バイリンガル教育研究会」代表
中島和子
2005.2.8